
横断歩道。

なゐこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

横断歩道。

【Nコード】

N0315B

【作者名】

なあこ

【あらすじ】

2人はあの横断歩道を渡ったことで今までと違った2人になった。でも時は過ぎ、あの横断歩道は別れへと導いてしまった。恋は、どうしてこんなに苦しいんだろう…。仕事一途な金子由里と同期でありながら部下の田浦の短い恋の話。

第一話

信号が青になった。もう行かなきゃ。

わかってるのに足が動かない。前の景色が揺らいで見える。

わかってる、わかってる。行かなきゃなのはわかってる。後ろを向けばまだあなたはいるんだろうな。でも、向いちゃダメ。

それでも気持ちとは裏腹に後ろを向いてしまった。

…あなたはもういなかった。

「何回言えばわかるのよ。これじゃダメなんだってば」

「いや変えましたよ、ほら」

そう言って田浦は、机の上に置かれた資料の一箇所指をポンと指した。

「あなた、人の話聞いているの？この箇所じゃないって言ったじゃない。ここよ」

「え？だってさっき」

「早くやり直してきて」

周囲のひそひそ声が聞こえてきた。いつものことだ。

「うわぁ、またやってる」

「でも今のは田浦君がかわいそうよね」

私と田浦は同僚である。だけど立場が違う。私は主任で、彼は平社員だ。

はつきり言って、私は田浦が苦手だ。

バカがつくほどいい人で、仕事の要領は悪い。それなのに頑固ときたらどうしようもない。

そして一番気に食わないのが、あの人柄。

周りの人をいつも温かく包み込む。田浦は太陽みたいだ。私にはないものを持っている。

わかってる。

ただの妬みだってことは。

過ぎていく。

毎日が足跡残さず過ぎていく。

何も感じない。

何も感じない。

信号が赤になって足を止めた。

夜だというのに、この街は人でいっぱいだ。

毎日毎日。

人でいっぱいだ。

「おい、金子」

私は、はっとして振り向いた。

やっぱり、田浦だった。

会社から出ると田浦は私をいつもそう呼んだ。「金子」と呼ぶのは

田浦だけだった。

「顔、死んでるぞ。大丈夫かよ？」

「何でここにいるのよ」

「何だよー、その言い草。他に言葉ないのかよー」

田浦は顔をくしゃくしゃにして笑った。相変わらず能天気だなと思った。

「今さっき彼女を送りにいったんだよ」

信号が青になった。

長袖を着る人が目立ってきた。夜はもう肌寒い。

人々は足早に横断歩道を渡っていった。

「飲みに行くか。ってか飲みにつき合ってくれよ、な？」

田浦はさっさと人混みに紛れて行ってしまった。相変わらず強引だなと思った。

「明日早いのに…」

独り言にもならないくらいの声でつぶやいて私は、田浦の後を小走りして追いかけた。

第一話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回、初めての作品です。

これからの執筆に活かしていきたいので、

悪いところ良いところの評価をぜひお願いします。

第二話（前書き）

田浦に誘われるがままに横断歩道を渡り、居酒屋に入ってしまった。
だけど金子はそこで自分の気持ちに気付いてしまう。でも田浦には
…。

第二話

「いらつしゃいませ」

ムードもかけらもない、若い人たちが集まる居酒屋。

「生でいいや。お前は？」

「んゝ明日朝早いし。ウーロンち…」

「生2つでゝ」

睨む私をよそに田浦は「まあーいいじゃん」と笑顔を見せた。
コイツは本当に強引だ。

全く、プライベートになると立場が逆転する。

私はただの女になってしまふ。どうしたことが。

田浦はおいしそうにご飯を食べて、
楽しそうに話をして、

私の言う事1つ1つに笑ってくれる。

…はつとした。

まずいと思った。

そんな私に田浦はすぐに気付いた。

「どうしたんだよ？」

田浦が覗き込む。

田浦の顔が心配してる。

田浦の瞳が見える。

「ごめん。私帰る」

お札を置いてお店を飛び出した。

早歩きで先を急いだ。「ちょっとー」若い女の子達にぶつかってしまった。

それでもろくに謝りもせず、どんどん歩いていった。

さっきの横断歩道の信号が点滅してる。私は走り出そうとした。

「おいっ!!」

ぐいつと腕を後ろに引つ張られた。

振り向かなくてもわかる。

その声。

その感触。

その存在。

信号は赤になってしまった。

車は走り出した。

田浦が必死に何か言ってる。

腕をまだ掴んでる。

私は前を見たまま振り向かないでいた。

やめて。

苦しいんだってば。

「聞ってる？」田浦が戸惑いを見せた。

やっと私は田浦の方を向いた。

「急にごめんね」

「あーもうびつくりするじゃん。俺なんかした？」

誰がみても今の2人は恋人だった。

勘違いなんかじゃない。

それがすごく辛かった。

これ以上深く関わってしまう前に、

これ以上好きにならないように、
田浦から離れないと。

だって、

田浦は彼女と婚約している。

式の日取りも立っている。

頭ではわかってるのに心がついていかない。

私がこんな気持ちなのを知ってか知らずか
田浦は頭をなでてきた。

私は。

私はどうすればいいんだろう。

信号がもうすぐ青になる。

人々は既に渡ろうとしている。

私は。

私はどうすればいいんだろう。

第二話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

前回から間があいてしまっでごめんなさい。次はもっと早く書きた
いと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315b/>

横断歩道。

2010年10月16日00時40分発行